

龜谷
行著
脩身兒訓

一

T 1A1

22

Pa 36

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 1 8 1 4 a

福岡教育大学蔵書

龜谷省軒編

第一卷

脩身兒訓

製本所 弘文北舎

修身兒訓序

易曰蒙以養正。夫蒙者。幼稚蒙昧。智識未開。邪正之分。惟在所養。使耳目之所濡染。無非格言善行。而邪僻不得入其中焉。是謂之善養蒙也。余生西海之陬。幼不得聞道。長好詞章。亦奔走乎功名之途。今也頭髮皤然。閱歷已深。於是乎取經子潛心讀之。半世所爲。其可悔者。

甚多。乃欲進修以少過。而未能。是雖緣資質魯鈍。亦坐童習無素也。昔者山崎闇齋著大和小學。貝原益軒作大和俗訓初學訓諸書。其言諄諄。導人極博。今余撰此編。豈敢比二賢。然僻邑之上。或將有資焉者也歟。

明治庚辰冬十二月

省軒之龜谷行撰

修身兒訓卷之一

龜谷行編

第一章 孝弟

○能く父母に事ふる之を孝と謂ふ

○能く兄に事ふる之を悌と

謂ふ

○孝悌ハ身を立つるの本な

り

○孝悌を行ふは愛敬哉主

と云

○愛とは人を以つくこと

疎そゝからざる也

○敬をえ人をうやまひて侮

らばるゝ也

○己より年長ぜる者を都て

敬ふべし

○己より年少き者を都て愛

を勉む

○弟と妹とハ尤も愛隣をべ

○兄弟を我が同胞をり

○和好して争ふことなれ

○父母比恩は山より高し



○父母乃慈愛
を忘るべから
む

○孝養を盡し
る人の道を

○孝子は天に

恵を受く

○父母召む時ハ速ニ小住く

弱

○父母乃命を背くべからず

○父母諷めば謹ミ聴ク勤シ

○怒リ恨むたふと有る事ナ

らず

○父母疾あら

む傍ニ侍るべ

一

○背を撫で足

を摩ミ怠る事



か

○出入ハ必ズ父母ニ告ぐ

○告げずして遠く遊ぶ事不可なり

第二章 養生

○孔子曰く父母を唯其疾あるを是憂ふ

○養生を孝行此一端なり

○運動度不適ハ疾少し

○大食は脾胃を損ふ

○不潔も健康に害あり

○身體を數沐浴をべー

○住處ハ日々掃除をべー

○酒や火酒や童兒の害あり

○藥を苦みせども疾み利あり

第三章 師友

○己の師たる者を都く敬ふ

○

○父母を吾と生み師は吾哉

教ふ

○師の事ふ親の事ふる

が如く

○位高くとも驕る處ありべ
○長者と坐するも下席に
著る處し

○長者と路に遇ふ心も禮
揖すべし

○路を行ふに長者を後る可

し

○疾行するに長者を先つこと
勿れ

○善友は親を可し

○惡友を遠ざく可し

○朋友を欺く處あり

修身訓 卷之二 六 朋友は信義を尊くすべし

○朋友は信義を尊くすべし

○朋友は學校に於て親しむ

○學問は朋友に因て進む

第四章 學問及勉勵

○學問は人の才智を益はす

○學問はく乃徳義を長ず

○學ばざれば草木に同し

○學ばば其が牛馬に異るら

む

○學問は心を一途に用ゐる

べし

○西諺に曰く二兎を追ふ者

皆身死す



一 兎 獲 得 せ

○ 人 も 倦 と も

勤 む 登 一

○ 勉 強 も 大 果

計 才 小 勝 了

○ 人 生 は 勉 強

小 在 り

○ 西 諺 小 曰 く 勤 勉 ハ 幸 福 の

母 な り

○ 勤 勉 ハ 忍 耐 小 成 熟

○ ラ ス キ ン 曰 く 忍 耐 と 快 樂

乃 根 本 必 至

○風雪を經け

せば春に遇え

む

○西諺に曰く

苦を以て樂と

き世を成功身



小隨ふ

○安逸に長むる者ハ才を成

し難し

○スマイルス曰く貧苦に遇

ふざるハ人の不幸なり

第五章 言語

○學問をる人を言行を慎む

○

○西諺に曰く一介は善行を

十介の學問より勝る

○言ふ事ハ易く行ふ事を難

○

○西諺に曰く拙かく行ふは

巧より言ふより勝る

○問ふ事あるは答ふべし

○問ふ事なくは黙して置

○人を笑へばくは憎む

○人々譏をる人お忍み

○人を罵れど人々怒らふ

○人々諍へる人々笑はる

○人の悪事ハ語ることを勿し

○人此善事を苟も誹るをも

勿れ

○楊子雲曰く言輕けむを憂

を招く

○西諺云曰く口と財布を閉

づるは利阿星

第六章 容儀 躬行

○朝も早く起き父母の安否

を伺ふをト

何事
六回不雅

○必ぢ手洗ひ口漱ぐぞー

○髪を櫛るべー亂る處から

べ

○面ハ洗ふぞー垢のくまら

らぢ

○坐する時ハ端正なれべー

○股を開き足を伸ぬると不

恭なる

○爐邊に坐せど火残弄はべ

あらぢ

○車上にお在りては眠ふ事勿

れ

各事
三
五
八
上
下
七

○書籍を愛惜もべし

○書籍を汚し損ふ所から

べ

○硯ハ時々洗ふべし

○案は常々拂ふべし

○壁の小字を書く所を

○席のハ墨を汚すべからず

○故なく人の鳥獸を殺す所

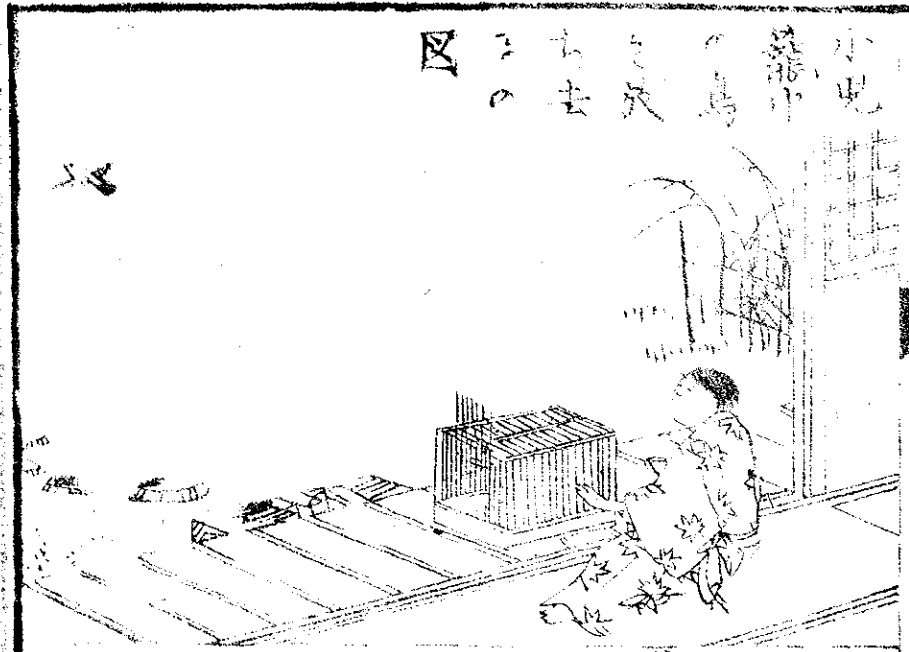
を

○戯れに魚鳥を害すること

母

○園裏の新花を折るべからず

小児 籠中 鳥 穴 土 区



のき

籠中 飛禽

を養ふを休免

よ

島木 小上

こと勿き恐ら

多 跌らん

深淵を窺ふこと勿き恐ら

くも陥らん

契約を輕く爲はんと勿

れ

人と約は變ぢ果て

みう終

○恩受ずと忘るべから
べ

○人を恵みてい念ふべから
ず

○飢ふる者ゑと飯を與ふべ
し

○渴したる者ゑ湯水を施
すべし

○碁と将碁を耽るべから
べ

○賭博を必らず爲さざら
ば

○人此物は決して盗むべからず

○盜竊乃辱を終身消えぬ

○人の財を羨望するからぬ

○己が財を費すこと勿れ

○行儀を正しく守るべし

○父母の譽を顯さん

修身兒訓卷一 終

明治十三年十一月廿五日

版權免許

著者出版

東京府上族光風社長

龜谷 行

製本發賣

大島 勝海

東京下谷神保町四丁目五番七番地
播磨岡山東中山下二百七番屋敷

龜谷省軒閣

修身見訓字引

右六類本アリ
關ヲ以テ真本トス

賣 捌

土佐高知 澤本 駒吉

備後尾道 三木 半兵衛

安藝廣島 松村 善助

豐後高田 吉原 張次郎